

二〇〇四年二月一日（夕拝）

いのちあるものへの祝福

創世記一章二〇節～二三節

天地創造の第五日の御業には、これまでの御業には見られない新しい面が二つあります。一つはすでにお話ししたことで、この第五日の御業においては、新たにいのちあるものが造り出されたという点で、創造の御業が新しい段階を迎えたということです。そしてもう一つは、二二節に、

神はまた、それらを祝福して仰せられた。「生めよ。ふえよ。海の水に満ちよ。また鳥は、地にふえよ。」

と記されていますように、この日が造り主である神さまからの祝福をもって終わっているということです。

この二つのことは深くつながっています。つまり、第五日にいのちあるものが造られたので、神さまはご自身がお造りになったいのちあるものを祝福されたということです。その意味で、創造の御業における神さまの祝福の宣言はいのちあるものに対して与えられていて、いのちの豊かさをもたらし、それを支えるものとなっています。

創造の御業の記事を離れることになりましたが、神さまは生き物以外のものも祝福してくださっています。たとえば、詩篇六五篇九節～一一三節には、

あなたは、地を訪れ、水を注ぎ、

これを大いに豊かにされます。

神の川は水で満ちています。

あなたは、こうして地の下ごしらえをし、

彼らの穀物を作ってくださいます。

地のあぜみぞを水で満たし、そのうねをならし、

夕立で地を柔らかにし、

その生長を祝福されます。

あなたは、その年に、御恵みの冠をかぶらせ、

あなたの通られた跡には

あぶらがしたたっています。

荒野の牧場はしたたり、

もろもろの丘も喜びをまもっています。

牧草地は羊の群れを着、

もろもろの谷は穀物をおおいとしています。

人々は喜び叫んでいます。

まことに、歌を歌っています。

と記されています。

ここでは、神さまが穀物の生長を祝福してくださっていることが記されています。植物は生き物ではありませんが、生長し実を結ぶものですし、その実をとおして増え広がっていきます。その点に生き物が生まれて増え広がっていくこととの類似性があります。そして、その豊かな実りは神さまの祝福によることです。それはまた、この詩篇の最後の部分に記されていますように、生き物、特に神のかたちに造られている人間への祝福と深くかかわっています。その意味でも、神さまの祝福はいのちの豊かさにかかわっています。

*

このことについてさらにお話する前に、創造の御業における神さまの祝福そのものについて、いくつかのことをお話しておきたいと思います。

神さまの祝福は、この日に造られた生き物たちに対して神さまが語られたという形を取っています、しかし、これは、その生き物たちが神さまからの語りかけを聞いたということではありません。その意味では、この神さまの祝福は、いわば神さまが一方的に、この日に造られた生き物たちの上に下してくださったものです。

そうではあっても、この祝福は、

生めよ。ふえよ。海の水に満ちよ。また鳥は、地にふえよ。

というように、命令のことで表わされています。そして、それは生き物たちに向けて語られています。けれども、生き物たちはこの神さまの祝福のことを聞いてはいません。このことをどのように考えたらいいのでしょうか。

これは何となくおかしなことのようには思われますが、実は、このことに、神さまの祝福の特徴があります。この神さまの祝福のことばは、

生めよ。ふえよ。海の水に満ちよ。また鳥は、地にふえよ。

というように命令の形を取っていますが、二〇節に記されている、

水は生き物の群れが、群がるようになれ。また鳥は地の上、天の天空を飛

べ。

という創造のことはも命令の形を取っています。このように、神さまの創造のことも祝福のことも命令の形を取っていますが、生き物たちは、そのどちらのことも聞いていません。その違いは、創造のことがいまだ存在していない生き物たちの存在そのものを造り出したことばであるのに対して、祝福のことばは、そのようにして造り出された生き物たちに向けて語られたことばであるということです。

このことは、神さまの祝福は神さまの主権的で一方的な働きかけによるものであるということを示しています。生き物も神のかたちに造られている人間も、神さまの主権的な創造の御業のお働きによっていのちあるものとして造り出され、神さまの主権的な祝福によっていのちの豊かさのうちに住まうように祝福されているのです。

神さまの祝福が神さまの主権的な愛と恵みから出ているということとのかかわりでお話したいのですが、聖書には、民数記六章二四節〜二六節に記されている大祭司の祝福や、使徒たちの手紙の最後に記されている使徒の祝福など、神さまに召された人々の祝福のことが記されています。しかし、その祝福そのものはその人々が与えるものではなく、神さまが与えてくださるものです。造られた世界の祝福の源は、造り主である神さまご自身です。人は、すべての祝福の源である神である主の御名によって祝福し、神さまの祝福を求めるのです。実際、大祭司の祝福は、

主があなたを祝福し、

あなたが守られますように。

主が御顔をあなたに照らし、

あなたが恵まれますように。

主が御顔をあなたに向け、

あなたに平安を与えられますように。

というものです。また、使徒の祝福の一つを見てみますと、コリント人への手紙第二・一三章一三節には、

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがたすべてとともにありますように。

と記されています。どちらも、神である主の祝福を求めるものです。その意味で、人は主のみこころにそって、また御名によって祝福しなければなりません。

生き物も神のかたちに造られている人間も、神さまの主権的な創造の御業のお働きによっていのちあるものとして造り出され、神さまの主権的な祝福によっていのちの豊かさのうちに住まうように祝福されているということは、神さまの創造の御業と神さまの祝福が深くつながっていることを意味しています。その意味で、神さまの創造のことばと祝福のことばは深くつながっています。そして、神さまの創造のことばと祝福のことばが深くつながっていて、どちらも、命令の形で語られているということは、神さまの祝福のことばが、創造のことばのように力があることを意味しています。

神さまは、創造の御業において、創造のことばによって、この世界とその中にあるすべてのものを造り出されました。同じ創造の御業において語られた祝福のことばも、同じように力があって、そのみことばによって語られたことを実現します。イザヤ書五五章一〇節、一一節には、

雨や雪が天から降ってもとに戻らず、
必ず地を潤し、

それに物を生えさせ、芽を出させ、
種蒔く者には種を与え、
食べる者にはパンを与える。

そのように、

わたしの口から出るわたしのことも、
むなしく、わたしのところに帰っては来ない。

必ず、わたしの望む事を成し遂げ、

わたしの言い送った事を成功させる。

と記されています。

ですから、創世記一章二二節の、

生めよ。ふえよ。海の水に満ちよ。また鳥は、地にふえよ。

という、造り主である神さまの祝福のことばは、神さまがお造りになった生き物たちが、生み、ふえ、地と水に満ちるようになることの基礎です。生き物たちは、この造り主である神さまの祝福のことばに支えられて、生み、ふえ、地と水に満ちるようになるのです。

このように、神さまの祝福のことばは、創造のことばと同じように力があり、そのことばに示されていることを必ず実現します。そこに、神さまの祝福の確

かさがあります。

*

しかし、神さまの祝福のことばは、創造のことばと同じものではありません。神さまの祝福のことばは、神さまの創造のことばとその実現を前提としていて、その上に立って、宣言されています。二二節の、

生めよ。ふえよ。海の水に満ちよ。また鳥は、地にふえよ。

という祝福のことばは、これらの生き物が造られたことを前提としています。そこに生き物たちの存在があるということだけではなく、これらの生き物たちが、子孫を生んでふえる能力を備えていることも含まれています。

さらには、これらの生き物が子孫を生んでふえ広がるために必要な地や海は、創造の御業の第三日に整えられていますし、生き物たちの生存を支える食べ物も、第三日に備えられていました。神さまの祝福のことばは、そのような、創造の御業による備えを踏まえて語られています。

このように、神さまの創造のことばは、それまでにはなかった新しいものや、新しい状態を造り出すものです。これに対して、祝福のことばは、そのようにして造り出されたものにかかわるものです。それでは、祝福のことばはどのような意味をもっているのでしょうか。

創造の御業において祝福のことばが語られているのは、一章二二節に、

神はまた、それらを祝福して仰せられた。「生めよ。ふえよ。海の水に満

ちよ。また鳥は、地にふえよ。」

と記されている、生き物への祝福と、二八節に、

神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。「生めよ。

ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生

き物を支配せよ。」

と記されている、神のかたちに造られている人間への祝福です。

このほか、祝福のことばが語られたことは記されていませんが、一章三節に、

神はその第七日目を祝福し、この日を聖であるとされた。それは、その日

に、神がなさっていたすべての創造のわざを休まれたからである。

と記されているように、第七日全体が祝福されています。

けれども、第七日の場合には、祝福されただけでなく聖別されてもいます。

また、第七日はこの時間的な世界にかかわるものですが、第一日から第六日とつながって、神さまの創造の御業の時間的な枠組みを構成しています。その意

味で、第七日は、生き物や人間のように、創造の御業によって造り出されたものとは区別されず。

それで、ここでは、第七日の祝福と聖別は外して、生き物への祝福と、神のかたちに造られている人間への祝福に注目してみましよう。

*

生き物への祝福は二二節に記されています。これは創造の第五日の御業の中でのことです。そうしますと、二四節、二五節に記されています地上の生き物の創造は、第六日の御業として記されていますので、地上の生き物への祝福はどうなっているのかという疑問が出てきます。

これについては、すでにお話ししました天地創造の御業の記事の中で用いられている「創造した」（バーラー）ということばを思い出すとよいかと思います。この「創造した」（バーラー）ということばは、天地創造の御業の記事全体への「見出し」である一章一節で用いられた後は、二一節で、

それで神は、海の巨獣と、その種類にしたがって、水に群がりうごめくすべての生き物と、その種類にしたがって、翼のあるすべての鳥を創造された。

と言われている中で用いられています。

これは、この第五日の御業において、いのちをもっていて、本能的ではあっても、自らの意識にしたがって活動する生き物が造り出されたことによって、創造の御業が新しい段階を迎えたことを意味していました。二二節に記されています生き物に対する祝福は、このことを受けています。

創造の御業の記事の流れの中では、次に、「創造した」（バーラー）ということばが用いられているのは、二七節で、

神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。

と言われている中で、三回繰り返し返されています。

これは、神のかたちに造られている人間が創造されたことによつて、神さまの創造の御業が、さらに新しい段階を迎えたことを意味しています。二八節に記されています、神のかたちに造られている人間への祝福はこのことを受けています。

この「創造した」（バーラー）ということばによる区切りでは、第五日に初めていのちあるものとしての生き物が造られたことで、それまでの御業に対し

て一区切りがなされます。そして、この生き物たちへの祝福が与えられています。このことの上に立ってなされている御業は、神のかたちに造られている人間が造られたことよって、さらに一区切りができています。そして、神さまの祝福もこの新しい区切りに対応してなされています。その意味で、第六日に造り出された地上の生き物への祝福は、第五日に宣言されている生き物たちへの祝福の枠の中に含まれています。

確かに、二二節の祝福のことばは、

生めよ。ふえよ。海の水に満ちよ。また鳥は、地にふえよ。

というものですから、それは、水にすむ生き物や飛ぶものに当てはまるものです。けれども、この祝福の中心は「生めよ。ふえよ。」ということにあり、その結果、それぞれの生き物が生息する所を満たすようになるということです。このことは、そのまま、地上に生息する生き物にも当てはめることができます。

*

さて、二二節に記されている、

生めよ。ふえよ。海の水に満ちよ。また鳥は、地にふえよ。

という生き物への祝福のことばと、二八節に記されている、

生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうす

すべての生き物を支配せよ。

という神のかたちに造られている人間への祝福のことばを比べてみますと、「生めよ。ふえよ。……を満たせ。」という部分が共通しています。二二節の、

生めよ。ふえよ。海の水に満ちよ。

は、直訳では、

生めよ。ふえよ。海の水を満たせ。

です。この「海の水」を「地」に置き換えれば、二八節の、

生めよ。ふえよ。地を満たせ。

となります。

神のかたちに造られている人間の場合には、これに、

地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすすべての生き物を支配せよ。

ということが付け加えられています。

これは、二六節に、

そして神は、「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。

そして彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべ
てのものを支配させよう。」と仰せられた。

と記されている、神さまの創造のことはを受けています。この神さまの創造の
ことばでは、人間が、

地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすすべての生き物を支配せよ。

と命じられているのは、人間が神のかたちに造られているからであることを示
しています。つまり、人間は神のかたちに造られているものとして、神さまが
お造りになったものを、神さまのみこころにそつて治める使命を委ねられてい
るということです。それは、造り主である神さまがお造りになったものを大切
にして、それぞれの生き物が神さまから与えられている特性にそつて生きるこ
とを支える使命です。

そのような使命を遂行することをおして、造り主である神さまの栄光を現
わすことが、神のかたちに造られている人間の尊厳性と栄光の現われでもある
のです。

*

この二二節に記されている生き物への祝福と、二八節に記されている神のか
たちに造られている人間への祝福から分かることは、最初に少し触れましたが、
神さまの祝福は、いのちあるものの、いのちの豊かさにかかわっているという
ことです。創造の御業の中では、いのちあるものが造られるまでは祝福が語ら
れることはありませんでした。

生き物たちも、神のかたちに造られている人間も、造り主であり、いのちの
源である神さまの祝福にあずかつて、そのいのちが、さらに豊かに増え広がる
ようになります。

神のかたちに造られている人間の場合には、それとともに、そのいのちが造
り主である神さまの愛といつくしみに満ちた栄光を現わすことをとおして、神
のかたちとしてのいのちをより豊かに表現するのです。

このことを踏まえて、人間に委ねられている、

地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすすべての生き物を支配せよ。

という使命を考える必要があります。神のかたちに造られている人間が、造り
主である神さまの祝福の下に、

地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすすべての生き物を支配せよ。

という使命を受けたときには、すでに、委ねられた生き物たちは造り主である

神さまの祝福を受け、その祝福の下に置かれていたのです。それで、神のかたち
に造られている人間がそれらの生き物たちを治めるといふことは、造り主で
ある神さまの祝福の下に置かれてある生き物たちが、より豊かないのちの実を
結ぶようになるために、仕えることであることが分かります。その意味で、神
のかたちに造られている人間は、造り主である神さまが生き物たちを祝福して
くださった祝福を実現する使命を与えられています。神のかたちに造られてい
る人間は神さまの祝福の器として召されているのです。

*

すでにお話しましたように、創造の御業の記事の中では、「創造した」（パー
ラー）ということばが用いられていることによって区切りが示されています。
その区切りは、いのちあるものが造り出されたことと、神のかたちに造られて
いる人間が造り出されたことによって、創造の御業が新しい段階を迎えたこと
を示していました。

いのちあるものが造り出されたことによって、創造の御業が新しい段階を迎
えたのは、造り主である神さまご自身が生きておられる方であり、いのちその
ものであられるからです。生き物たちは、いのちあるものとして、造り主であ
る神さまが生きておられる方であることをあかししています。

そして、神のかたちに造られている人間が造られたことによって、造り主で
ある神さまが生きておられる方であることが、より豊かな形であかしされるよ
うになりました。

創造の御業の中では、このような、いのちあるものが、神さまの祝福を受け
ています。それは、そのいのちあるもののいのちがより豊かなものとなること
を意味しています。それによって、神さまが生きておられる方であることが、
さらに豊かな形であかしされるようになります。

このことは、神さまの祝福は、いのちあるものが、いのちそのものであられ、
いのちの源である神さまにより深くかわるものとしていただくことにある、
ということを示しています。神のかたちに造られている人間は永遠のいのちの
祝福に招かれています。その永遠のいのちは、ヨハネの福音書一七章三節に、

その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなた
の遣わされたイエス・キリストとを知ることです。

と記されているように、御子イエス・キリストにあつて、父なる神さまを知る
ことであり、その愛の交わりのうちに生きることです。